

した……」としている。湯浅謹而『野口英世』もこれと殆んど同文であるが、松田正直を長崎県士族としている。筆者の閲読し得た野口伝は全てでないが、この記載に追従、右四名の氏名を列記しているものに、小村剛史、筑波常治『野口英世』、渡辺淳一『遠き落日』などがある。八〇名中四名合格とのみ記したものに、丹実『野口英世の生涯』、小泉丹、中山茂、プレセット『野口英世』等がある。後期試験合格のみを記したものに、東京歯科医学専門学校編『野口英世その生涯及業績』、エクスタイン、志賀潔、宮島幹之助、中井久夫、渡辺得治郎、高橋進等のものがあるが、これら著者の殆んどは伝記作家ではないが、著述が昭和八年奥村本刊行以前のものである。

受験者八〇名中合格者四名とした、奥村説の論拠が何処にあるのか、今日明らかにし得ないが、奥村本発行以来、これが野口伝の定本とされたため、以来野口伝類書の多くがこの誤りを追従している。更に、前記松田正直については、合格発表名簿に記載がされていない。八〇名中四名説は、合格発表直後の撮影とされている記念写真に係りがあると考えられるので、これを含め検討する。(京都大学)

62 最初期歯科X線診断学の文献的研

究(その一)

—機器、フィルム、露出時間等について—

○塩津 二郎・森山 徳長

昨年第十九回本学術大会で、われわれはわが国でX線歯科診断を最初に紹介発表したのは、「湖柳生」こと野口英世であること、およびその原著についても報告した。

またわが国と諸外国で最初期の研究者たちが、苦心して歯科診断への道を模索した情況とPriorityについて概説した。

今回が独・英・米の初期研究者たちが、X線撮影装置の改良に取組んだ道筋をたどり、診断に活用できる程度の歯科X線像を得るための努力の軌跡を追求した結果を報告する。

今回はレントゲンの最初の発見からおおよそ十五年の期間

を目安として検討した。

△器械の改良▽

最初のレントゲンの実験した発生装置は、真空度を変えられないものであった。大型な Rukmkorff または Tesla コイルを用い、不完全真空の管球を用いていた。ポルトメーターもミリアンペアメーターも存在しない条件下で、一定の X 線を出すことは不可能であり、非常に不安定なものであった。電圧の高さを計る方法は極間のスパークの起こる距離で判断された。今日では考えられない状況であった。色々の試行錯誤により、交流電流からの安定した高電圧へと次第に改良が加えられていったのである。

△レントゲン火傷▽

螢光を直接肉眼で見るといったことが危険であることは、当時の研究者には未知のことで、多くの開拓者がその命を失う結果となった。ただし、一八九六年に早くも英国の Harrison は実験助手の X 線火傷を報告しており、一部の研究者には周知の事実であったことも確かである。個々の研究者、文献の記載について報告する。

△フィルムの変遷▽

最初は普通の写真乾板を用いた。歯科用に、現在の口内法に似た方法としては、暗室で乾板を切断し黒い紙に二、三重に包んで用い、唾液でぬれた場合は包み直した。ラバーダムまたはガッターチャで包装した研究者もある。

口蓋に合わせて乾板の角をカットしたり (Catching) ホルダーに装着して咬合させて撮影する (C. E. Kells) 工夫も行われた。それらの経験は、口内法では必然的に、フィルムムの便利さに着目させる結果となって行った。

△露出時間▽

Walkhoff が口内法で、二十五分をかけて歯牙の輪郭らしきものを乾板に映し取ったのが始まりである。

発表者によって十、五分と色々異なるが、装置と方法により一八九七年一月 Catching は一分で良い結果を得ている。

秒単位の報告もあり、それらの比較は興味深いところである。

以上を、個々の報告にもとずき比較検討して、発達史を明らかにしたいと思う。

(東京歯科大学)